創価大学　看護学部
紀要第２巻　２０１６
（2017年9月1日発行）

〈実践報告〉

看護基礎教育における産褥期の母子への看護実践能力の習得を目指した教育実践

二村文子[1)]　片岡優華[1)]　志村千鶴子[1)]

Educational Report of Nursing Students' Competencies Required for Puerperal Care in the Basic Nursing Education

Fumiko NIMURA[1)] Yuka KATAOKA[1)] Chizuko SHIMURA[1)]

【目的】講義・演習・実習を通して、学習状況や褥婦・新生児の診察技術、実習での看護実践の学習達成度を明らかにし、課題を検討することを目的とした。

【方法】講義での小テスト・質問紙調査、状況設定による褥婦・新生児の診察技術の演習・学内実習、病院実習での看護実践に対して、その学習達成度を評価した。演習は 75 名、実習は 76 名の学生を対象に、３段階尺度による評価をした。

【結果】小テストの産褥期の看護の問題は、約７割が 80%以上の正答率であった。「実習に向けた自己学習」は、受講後の方が受講前に比べ有意に得点が高かった ($p<.05$)。演習・実習の評価では、「できた／自立してできる」「大体できた／ほぼできる」を合わせた割合は、１項目を除き８割以上であった。

【考察】産褥期の母子への看護実践能力の習得を目指し、講義・演習・実習で学習した知識や診察技術を統合させた教育実践により、学習目標は達成できたと考えられた。

キーワード：母性看護、産褥期、看護実践能力、教育実践
maternal nursing, puerperium, nursing competence, educational report

Ⅰ　緒言

近年、医療の高度専門化や患者の重症化に伴い、看護師には高度な看護実践能力が求められている。また、臨床での看護師の看護実践能力と看護学生の卒業時の看護実践能力との乖離が大きいことも指摘されている。その状況において、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」（厚生労働省，2007）では、看護師教育課程で教授する技術項目

1) 創価大学看護学部　Soka University Faculty of Nursing

と卒業時の到達度が具体的に示され、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」（厚生労働省 , 2011）では、卒業時の到達目標が見直され看護基礎教育における効果的な教育方法が示された。母性看護学領域の看護学教育研究では、新生児の生理的黄疸の観察やアセスメントに関する学内演習の評価（戸部ら , 2002）や、母性看護学実習における看護技術到達度の実態調査（矢野ら , 2014）等が報告されている。このように、学内演習や臨地実習における看護実践能力の習得に関する内容は散見されるが、講義・演習・実習を通して複数の年次に渡り段階的に、各々の学習目標の達成度を調べたものは見当たらない。また、学生は現実の臨床状況を想定することが難しいため、場面設定を用いた学習は看護過程と実践を一連の流れとして学生の理解を促し、看護の具体的なイメージに繋がることが報告されている（磯山ら , 2014）。これらのことから、学生の看護実践能力の育成・強化のためには、講義・演習・実習の組み立て方や教育方法の工夫、その評価が重要な課題となっている。

Ａ大学の母性看護学領域では、周産期の看護実践のために妊娠・分娩・産褥・新生児期が正常な経過であるかを判断し、対象がより順調に経過するために必要なケアを見出し、基本的な看護技術を提供できることを学習目標としている。それに対するカリキュラムは、母性看護学概論では女性のライフサイクル各期の健康問題とその看護や母子を取り巻く環境等を理解し、母性看護援助論Ⅰでは妊娠・分娩・産褥・新生児期の対象を理解し、正常経過の判断やセルフケアを高める援助に必要な基礎知識を教授している。また、母性看護援助論Ⅱでは産褥期の母子と家族に対する看護過程を展開し、臨床判断に必要な基礎知識を教授している。これらの学習をふまえて、母性看護学実習が開講される。実習では、既習の知識と照合して正常経過であるかを判断することや、教員や臨床指導者の指導下で経過の判断をし、不慣れな環境で看護技術を提供するため、学生にとって緊張度が高く、習得した技術を正確に実施することが難しいことが考えられる。そこで、実習初日の学内実習では、状況設定による新生児の診察技術の確認と形成的評価を行い、病院実習に臨んだ。

本研究では、講義・演習・実習で学習したことについて、学生の自己評価、学生・教員の他者評価を行い、学生の学習状況や褥婦・新生児の診察技術、及び実習での看護実践に対する学習達成度と課題について検討したことを報告する。

Ⅱ　方法

1．倫理的手続き

学生に対して、母性看護援助論Ⅰの初講時に、研究の目的、講義での小テストやアンケートは教育・研究の一環として行うことを口頭及び書面で説明した。講義のアンケートは無記名式で行い、その回答をもって本研究への同意とした。また、全ての成績評価が終了した後、演習・実習での評価表、実習後アンケートの自由記載の内容を研究で使用すること、研究参加の同意は自由であること、データは全て匿名化されること、研究への参加・不参加は評価に一切関係しないこと、成績評価が終了した後に分析を行うこと、公表の際には個人が特定されないようにすること等をポータルサイトでの講義連絡により学生に説明し、同意が得られたものを対象とした。本研究は、創価大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：28035）。

2. 対象

調査対象は、平成27年度開講の母性看護援助論Ⅰ・母性看護援助論Ⅱ、平成28年度開講の母性看護学実習を履修した学生と母性看護学領域の教員4名とした。

3. 学習目標と内容・方法、及び評価

1) 学習目標と内容・方法

母性看護学の看護技術教育に関連する科目と実施内容を表1に示す。

(1) 講義・演習

母性看護援助論Ⅰでは、学習目標の1つに「産褥期の女性の生殖器の変化・全身の変化と生活適応、新生児の生理的変化と適応について理解し、産褥早期の母子への看護に関する知識を習得する」ことを挙げている。内容は、「妊娠期の看護」5コマ、「分娩期の看護」7コマ、「産褥・新生児期の看護」3コマで構成される。

母性看護援助論Ⅱでは、学習目標の1つに「産褥期・新生児期のケアの展開について、母子を関連づけて具体的な事例を用いて看護ケアを考えることができる」ことを挙げ、「産褥期の看護」6コマ、「褥婦・新生児の診察技術」2コマを実施した。

(2) 実習

母性看護学実習の学習目標には、「1. 妊婦・産婦・褥婦及び新生児の特徴を理解し、対象に応じた看護を実践するための基礎的な能力を養う」「2. 妊娠・分娩・産褥・新生児期をより順調に経過するための対象に必要なケアを見出し、基本的な看護技術が実施できる」ことを挙げている。実習初日は、講義・演習と同じ母子の事例を用いて、より詳細に状況設定し、新生児の診察技術について学内実習（1日）を実施した。病院実習（8日間）では、教員または臨床指導者の指導下で、受け持ち褥婦・新生児に対し、経過判断と正常からの逸脱を早期発見し対応するための診察技術を実施した。

2) 評価の内容・方法

(1) 講義の小テストによる評価

母性看護援助論Ⅰの講義では、学生の知識の習得状況を把握し、学生が国家試験問題の出題形式に慣れることをねらい、国家試験出題基準をふまえた自作の小テストを計10回（各回5問）実施した。そのうち、産褥期の看護に関する問題は合計13問で、国家試験出題基準の産褥期に関する7項目（各項目1～3問）から出題した。また、小テストは、学生が自己学習の習慣を身につけることをねらい、回答にあたり教科書等の参照を許可し、配布から1週間後の提出とした。

(2) 講義アンケートによる受講前後の評価

表1　母性看護学の看護技術教育に関連する科目と実施内容

科目名	開講時期	回数(単位)	実施内容
母性看護学概論	2年次後期	15回(2単位)	・女性のライフサイクル各期の健康問題と看護等（講義）
母性看護援助論Ⅰ	3年次前期	15回(1単位)	・妊娠期、分娩期、産褥・新生児期の看護(講義) ・小テスト10回、各回5問(産褥期の看護に関する問題13問) ・受講前後のアンケート
母性看護援助論Ⅱ	3年次後期	8回(1単位)	・産褥・新生児期の看護過程 (講義) ・褥婦・新生児の診察技術(演習)
母性看護学実習	4年次前期	2週間(2単位)	・新生児の診察技術(母子の状況設定による学内実習) ・実習後の評価 ・実習後のアンケート

母性看護援助論Ⅰのアンケートは、受講前は第1回の講義で実施し、前年度の母性看護学概論の終了時点について、また、受講後は第15回の講義で実施し、その時点について回答を求めた。内容は、講義・実習、国家試験に関する学生の学習状況に関するもので、合計28問とした。また、受講前後の自己評価に関する設問のうち、講義や実習に対する意識に関するものは、3問（「実習への意欲」「実習に向けた自己学習」「講義での学習を実習に役立てたい」）であった。

評価方法では、「どちらともいえない」という項目は、賛否をはっきりさせない傾向を助長する可能性があるため（Politら, 2004/2010）、評価尺度には含めなかった。また、看護教育の評価に関する尺度は、5段階リッカート尺度を用いたものが多く示され（舟島ら, 2013）、3段階評価に比べ学生の状況を詳細に捉えられると考え、5段階尺度による評価とした。

(3) 演習・実習の評価

演習・実習で使用した評価表の項目は、褥婦や新生児の診察を行う際の手順や留意点に着目して、母性看護学の教科書や参考書を基に作成し、教員間で内容の妥当性を確認した。

演習の評価は、褥婦の診察技術11項目（表4の評価項目）、新生児の診察技術8項目（表5の評価項目）の技術達成度とした。また、実習の評価は、16項目（表6の評価項目）の達成度とした。

評価方法では、看護スキルチェックリストなどは、特定の明確に定義された行動の評価に有用であり、「できる／できない」等の2段階の評定で、一般的に臨床のシミュレーション実験環境において利用される（Billingsら, 2012）。評価尺度は、学生が演習・実習で習得できたスキルの状態を確認できるようにするため、「できる」の程度を2分類し、演習では「できた」「大体できた」「努力が必要」、実習では「助言で自立してできる」「助言でほぼできる」「助言でやっとできる」（以下、「自立してできる」「ほぼできる」「やっとできる」とする）の3段階評価とした。

評価での学習目標の達成基準は、演習では「できた」「大体できた」、実習では「自立してできる」「ほぼできる」を合わせた割合が8割と設定し、演習では学生の他者評価、実習では学生の自己評価・教員の評価を行った。

(4) 実習後アンケートによる評価

実習後アンケートは、実習内容や方法・指導内容や方法・実習環境等に関する設問と、事前学習の活用等に関する自由記載欄を設けた。

3) 分析方法

講義の小テストは、各問題の正答率を求めた後に、国家試験出題基準別に正答率の平均値を算出した。講義アンケートは、尺度とした「とても高まった／とてもできている」を5点、「まあまあ高まった／まあまあできている」を4点、「少し高まった／少しできている」を3点、「あまり高まらなかった／あまりできていない」を2点、「全く高まらなかった／全くできていない」を1点として、リッカート尺度構成法的に頻度に応じて尺度値を当てはめ統計処理した。各項目の中央値、平均値及び標準偏差、度数分布を求めた。また、受講前後の評価を比較するために、Mann-WhitneyのU検定を行った。演習・実習の評価項目は度数分布を求めた。統計処理には、統計解析用ソフトSPSS（Ver.22 for Windows）を使用し、有意水準（両側）は5%とした。また、実習後アンケートの事前学習の活用に関する自由記載は、類似した内容ごとにカテゴリー化した。

表2　産褥期の看護に関する問題の正答率（国家試験出題基準別）　n=76

産褥期の母子への看護に関する問題	問題数	各問題の正答率 (%)			平均正答率 (%)
		問1	問2	問3	
周産期にある人と家族の看護（産褥の生理と褥婦の看護）					
退行性変化	1	92.4			92.4
進行性変化	1	51.5			51.5
褥婦の心理	2	80.9	98.5		89.7
褥婦の日常生活とセルフケア	2	95.5	99.2		97.4
親役割への支援	2	93.4	67.6		80.5
周産期の異常と看護（産褥の異常と看護）					
帝王切開術後	3	94.1	60.0	77.0	77.0
死産、障害をもつ新生児を出産した親	2	100.0	100.0		100.0
全　体	13				84.1

Ⅲ　結果

小テストは76名、講義アンケートは受講前78名・受講後76名、演習・学内実習は75名、実習及び終了後アンケートは76名の学生から研究参加の同意が得られ、それぞれを分析対象とした。

1．講義での学習達成度

1) 小テストの結果（表2）

小テストのうち、産褥期の看護に関する問題（13問）の結果について、国家試験出題基準別に正答率を表2に示した。正答率が80％以上の問題は、13問中9問で約7割であった。平均正答率の高い順では、死産・障害をもつ新生児を出産した親（100.0％）、褥婦の日常生活とセルフケア（97.4％）、退行性変化（92.4％）、褥婦の心理（89.7％）、親役割への支援（80.5％）であった。最も正答率の低かった問題は進行性変化（51.5％）であり、これは問題の中で唯一、過去の国家試験に出題されていない問題であった。

2) 講義前後のアンケート結果（表3）

受講前後での学生の評価を、表3に示す。

アンケート3項目について、「とても高まっ

表3　受講前後での学生の評価（母性看護援助論Ⅰ）

項目 注1)	時期	n	median	mean	SD	割合(%) 注2)	p値 注3)
実習への意欲	受講前	78	4.0	4.06	0.84	82.1	n.s
	受講後	76	4.0	4.03	0.86	77.6	
実習に向けた自己学習	受講前	78	2.0	1.85	0.79	3.8	p<.05
	受講後	76	2.0	2.24	1.04	14.5	
講義での学習を実習に役立てたい	受講前	78	5.0	4.85	0.40	98.7	n.s
	受講後	76	5.0	4.71	0.59	93.4	

注1) 各項目は、「とても高まった／とてもできている」を5点、「まあまあ高まった／まあまあできている」を4点、「少し高まった／少しできている」を3点、「あまり高まらなかった／あまりできていない」を2点、「全く高まらなかった／全くできていない」を1点として統計処理した。

注2) 割合(%)は、「とても高まった／とてもできている」「まあまあ高まった／まあまあできている」の割合を示す。

注3) Mann-WhitneyのU検定の結果を示す。（n.s: not significant）

た／とてもできている」「まあまあ高まった／まあまあできている」と回答した学生の割合は、「実習への意欲」では受講前82.1％、受講後77.6％、「実習に向けた自己学習」では受講前3.8％、受講後14.5％、「講義での学習を実習に役立てたい」では受講前98.7％、受講後93.4％であった。また、「実習に向けた自己学習」は、受講後の方が受講前に比べて有意に得点が高かった（$p<.05$）。

2. 褥婦・新生児の診察技術（演習）の達成度

1) 褥婦の診察技術に対する学生の他者評価（表4）

演習での褥婦の診察技術に対する学生の他者評価を、表4に示す。

学生の他者評価では、「できた」「大体できた」を合わせた割合は、「腹帯・衣服を整え、下肢浮腫の程度を触診」（84.0％）以外の10項目で9割を超えていた。また、「できた」と回答した上位3項目は、順に「子宮底の位置を確認」（96.0%）、「プライバシーや保温の配慮」（94.6%）、「褥婦の左側に立ち子宮体部を触診」（89.4％）であった。逆に、6割未満の下位項目は、順に「観察した内容を褥婦に説明」（53.3%）、「腹部の視診」（54.7%）、「腹帯・衣服を整え、下肢浮腫の程度を触診」（56.0%）、「判断したことを報告」（57.3%）の4項目であった。

2) 新生児の診察技術（演習）に対する学生の他者評価（表5）

演習での新生児の診察技術に対する学生の他者評価を、表5に示す。

学生の他者評価では、「できた」「大体できた」を合わせた割合は、全8項目で9割を超えていた。また、「できた」と回答した上位4項目は、順に「衣服を開き、呼吸を観察」（88.0%）、「正しい順序で呼吸音を聴取」（84.0%）、「第5肋間胸骨左縁

表4　褥婦の診察技術に対する学生の他者評価（演習）　n=75

	評価項目		1:努力が必要	2:大体できた	3:できた	未回答	2+3	合計
1	説明・了承を得る	n (%)	0 (0.0)	14 (18.7)	61 (81.3)	0 (0.0)	75 (100.0)	75 (100.0)
2	両膝を立て、掛け物で覆う	n (%)	2 (2.7)	12 (16.0)	61 (81.3)	0 (0.0)	73 (97.3)	75 (100.0)
3	プライバシーや保温の配慮	n (%)	0 (0.0)	4 (5.4)	71 (94.6)	0 (0.0)	75 (100.0)	75 (100.0)
4	腹部の視診	n (%)	3 (4.0)	31 (41.3)	41 (54.7)	0 (0.0)	72 (96.0)	75 (100.0)
5	褥婦の左側に立ち子宮体部を触診	n (%)	1 (1.3)	7 (9.3)	67 (89.4)	0 (0.0)	74 (98.7)	75 (100.0)
6	左手を添え、子宮収縮状態を観察	n (%)	1 (1.3)	8 (10.7)	66 (88.0)	0 (0.0)	74 (98.7)	75 (100.0)
7	子宮底の位置を確認	n (%)	1 (1.3)	2 (2.7)	72 (96.0)	0 (0.0)	74 (98.7)	75 (100.0)
8	子宮底の高さを手指幅で表現	n (%)	1 (1.3)	9 (12.0)	65 (86.7)	0 (0.0)	74 (98.7)	75 (100.0)
9	腹帯・衣服を整え、下肢浮腫の程度を触診	n (%)	12 (16.0)	21 (28.0)	42 (56.0)	0 (0.0)	63 (84.0)	75 (100.0)
10	観察した内容を褥婦に説明	n (%)	2 (2.7)	33 (44.0)	40 (53.3)	0 (0.0)	73 (97.3)	75 (100.0)
11	判断したことを報告	n (%)	4 (5.4)	27 (36.0)	43 (57.3)	1 (1.3)	70 (93.3)	75 (100.0)

表5　新生児の診察技術に対する学生・教員の評価（演習・学内実習）　n=75

	評価項目		演習（学生の他者評価）					学内実習（教員の評価）			
			1:努力が必要	2:大体できた	3:できた	未回答	2+3	1:努力が必要	2:大体できた	3:できた	2+3
1	衣服を開き、呼吸を観察	n (%)	0 (0.0)	8 (10.7)	66 (88.0)	1 (1.3)	74 (98.7)	15 (20.0)	35 (46.7)	25 (33.3)	60 (80.0)
2	聴診器を手掌で温める	n (%)	3 (4.0)	15 (20.0)	55 (73.3)	2 (2.7)	70 (93.3)	9 (12.0)	3 (4.0)	63 (84.0)	66 (88.0)
3	正しい順序で呼吸音を聴取	n (%)	1 (1.3)	8 (10.7)	63 (84.0)	3 (4.0)	71 (94.7)	4 (5.4)	16 (21.3)	55 (73.3)	71 (94.6)
4	第5肋間胸骨左縁で心拍数を測定	n (%)	2 (2.7)	9 (12.0)	61 (81.3)	3 (4.0)	70 (93.3)	9 (12.0)	12 (16.0)	54 (72.0)	66 (88.0)
5	最深部に先端を固定し、体温を測定	n (%)	0 (0.0)	13 (17.3)	59 (78.7)	3 (4.0)	72 (96.0)	18 (24.0)	14 (18.7)	43 (57.3)	57 (76.0)
6	安静を保ち観察	n (%)	2 (2.7)	24 (32.0)	46 (61.3)	3 (4.0)	70 (93.3)	0 (0.0)	3 (4.0)	72 (96.0)	75 (100.0)
7	新生児の保温に注意	n (%)	0 (0.0)	11 (14.7)	61 (81.3)	3 (4.0)	72 (96.0)	9 (12.0)	10 (13.3)	56 (74.7)	66 (88.0)
8	判断したことを報告	n (%)	1 (1.3)	30 (40.0)	41 (54.7)	3 (4.0)	71 (94.7)	4 (5.4)	28 (37.3)	43 (57.3)	71 (94.6)

で心拍数を測定」「新生児の保温に注意」（81.3%）、であった。逆に、6割未満の項目は、「判断したことを報告」（54.7%）の1項目であった。

3．実習での学習達成度

1）新生児の診察技術（学内実習）の達成度（表5）

学内実習での新生児の診察技術に対する教員評価を、表5に示す。

教員の評価では、「できた」「大体できた」を合わせた割合は、「最深部に先端を固定し、体温を測定」（76.0％）以外の7項目で8割を超えていた。また、「できた」と回答した上位3項目は、順に「安静を保ち観察」（96.0%）、「聴診器を手掌で温める」（84.0%）、「新生児の保温に注意」（74.7％）であった。逆に、6割未満の下位項目は、順に「衣服を開き、呼吸を観察」（33.3%）、「最深部に先端を固定し、体温を測定」「判断したことを報告」（57.3%）の3項目であった。

2）病院実習での褥婦・新生児の看護に対する評価（表6）

褥婦・新生児の看護に対する実習評価を、表6に示す。

学生の自己評価では、「自立してできる」「ほぼできる」を合わせた割合は、「事前学習の活用（知識）」（86.5%）以外の15項目で9割を超えていた。同様に教員の評価では、「評価に基づく看護計画の修正」（86.9％）、「看護実践の評価」（88.2％）以外の14項目で9割を超えていた。

また、実習での褥婦・新生児の看護について、学生が「自立してできる」と回答した上位3項目は、順に「新生児の観察」（64.5％）、「褥婦の観察」（53.9％）、「退行性変化に対するケア」（52.6％）であった。逆に、下位3項目は、順に「褥婦のアセスメント」（32.9%）、「母親役割獲得・家族役割調整の支援」（35.5%）、「看護目標の設定」（38.2%）であった。同様に、教員が「自立してできる」と回答した上位3項目は、順に「褥婦の観察」（75.0％）、「新生児の観察」（72.4％）、「日常生活ケア」（67.1%）であった。逆に、6割未満の下位3項目は、順に「褥婦のアセスメント」（7.9%）、「新生児のアセスメント」「評価に基づく看護計画の

表6　褥婦・新生児の看護に対する学生・教員の評価（実習）　n=76

評価項目		学生の自己評価				教員の評価			
		1:やっとできる	2:ほぼできる	3:自立してできる	2+3	1:やっとできる	2:ほぼできる	3:自立してできる	2+3
1　褥婦の観察	n (%)	1 (1.3)	34 (44.8)	41 (53.9)	75 (98.7)	1 (1.3)	18 (23.7)	57 (75.0)	75 (98.7)
2　褥婦のアセスメント	n (%)	3 (3.9)	48 (63.2)	25 (32.9)	73 (96.1)	3 (3.9)	67 (88.2)	6 (7.9)	73 (96.1)
3　新生児の観察	n (%)	3 (3.9)	24 (31.6)	49 (64.5)	73 (96.1)	0 (0.0)	21 (27.6)	55 (72.4)	76 (100.0)
4　新生児のアセスメント	n (%)	2 (2.6)	44 (57.9)	30 (39.5)	74 (97.4)	2 (2.6)	63 (82.9)	11 (14.5)	74 (97.4)
5　看護目標の設定	n (%)	3 (3.9)	44 (57.9)	29 (38.2)	73 (96.1)	1 (1.3)	60 (78.9)	15 (19.8)	75 (98.7)
6　看護計画の立案	n (%)	5 (6.5)	39 (51.3)	32 (42.2)	71 (93.5)	2 (2.6)	56 (73.7)	18 (23.7)	74 (97.4)
7　進行性変化に対するケア	n (%)	3 (3.9)	35 (46.1)	38 (50.0)	73 (96.1)	1 (1.3)	40 (52.6)	35 (46.1)	75 (98.7)
8　退行性変化に対するケア	n (%)	0 (0.0)	36 (47.4)	40 (52.6)	76 (100.0)	1 (1.3)	31 (40.8)	44 (57.9)	75 (98.7)
9　日常生活ケア	n (%)	1 (1.3)	36 (47.4)	39 (51.3)	75 (98.7)	0 (0.0)	25 (32.9)	51 (67.1)	76 (100.0)
10　退院後に向けたケア	n (%)	3 (3.9)	36 (47.4)	37 (48.7)	73 (96.1)	2 (2.6)	58 (76.3)	16 (21.1)	74 (97.4)
11　育児技術習得の支援	n (%)	4 (5.3)	39 (51.3)	33 (43.4)	72 (94.7)	0 (0.0)	56 (73.7)	20 (26.3)	76 (100.0)
12　母親役割獲得・家族役割調整の支援	n (%)	4 (5.3)	45 (59.2)	27 (35.5)	72 (94.7)	1 (1.3)	59 (77.6)	16 (21.1)	75 (98.7)
13　看護実践の評価	n (%)	3 (3.9)	39 (51.3)	34 (44.8)	73 (96.1)	9 (11.8)	55 (72.4)	12 (15.8)	67 (88.2)
14　評価に基づく看護計画の修正	n (%)	6 (7.9)	40 (52.6)	30 (39.5)	70 (92.1)	10 (13.1)	55 (72.4)	11 (14.5)	66 (86.9)
15　事前学習の活用(知識)	n (%)	10 (13.2)	33 (43.4)	33 (43.4)	66 (86.8)	6 (7.9)	26 (34.2)	44 (57.9)	70 (92.1)
16　事前学習の活用(看護技術)	n (%)	5 (6.6)	34 (44.7)	37 (48.7)	71 (93.4)	1 (1.3)	61 (80.3)	14 (18.4)	75 (98.7)

修正」（14.5%）であった。

3) 実習後アンケートの結果（表7）

事前学習の活用に関する自由記載について、表7に示す。

自由記載は33名から34件の記載があり、大きく3つの内容に分類された。【実践できてよかったこと】では、「教科書を読んで頭に入れることで知識が身についた」「実習初日の技術チェックで危機感をもち、事前学習が行えた」といった内容が11件であった。【学習方法の改善点】では、「実習で特に必要な知識・技術を具体的に挙げて学習できればよかった」「観察項目やアセスメント、ケアの根拠を考える力をつける学習が必要だった」といった内容が19件であった。【看護技術の練習】では、「新生児のバイタルサインの技術演習があってよかった」「進行性変化・退行性変化を観察し、アセスメントする技術練習をしてほしい」といった内容が4件であった。

表7　事前学習の活用に関する実習後アンケートの自由記載(34件)

カテゴリー	記載内容
【実践してよかったこと】(11件)	・教科書を読んで頭に入れることで知識が身についた (4件) ・実習初日の技術チェックで危機感をもち、事前学習が行えた (1件) ・事前学習が明確で詳しく教えてもらえた (6件)
【学習方法の改善点】(19件)	・実習で特に必要な知識･技術を具体的に挙げて学習できればよかった (8件) ・ポケットに入れてすぐ見られるノートを作り活用すればよかった (2件) ・観察項目やアセスメント、ケアの根拠を考える力をつける学習が必要だった (7件) ・授業資料は全て理解し、答えられるくらいの学習の深さが必要だと感じた(2件)
【看護技術の練習】(4件)	・新生児のバイタルサインの技術演習があってよかった (2件) ・もう少し前から技術練習ができるようにすればよかった (1件) ・進行性変化･退行性変化を観察し、アセスメントする技術練習をしてほしい (1件)

Ⅳ　考察

産褥期の母子への看護は、産褥期の母子に関する基本的な知識と経時的に変化する褥婦・新生児を観察した結果を照合して、母子の状態を判断した結果、的確な看護実践へとつながる。そのため、学生は、的確な診察技術に基づき母子を観察した結果から、対象に必要なケアを見出すことが可能となる。

そこで、実習までに学習した基本的な知識や褥婦・新生児の診察技術を統合させ、産褥期の母子に必要な看護実践能力を育成するために、講義・演習・実習での学生の自己評価及び学生・教員の他者評価から学習達成度と課題を検討した。

1．講義での学習達成度

母性看護援助論Ⅰでの国家試験出題基準別小テストの結果では、正答率は概ね80％を超えていたが、褥婦の進行性変化に関する問題は、特に正答率が低い結果であった。このことから、過去の国家試験問題に出題されていない内容については、講義での基本的知識の理解と自己学習による知識の定着をともに強化する必要があると考える。

講義アンケートでは、「実習への意欲」「講義での学習を実習に役立てたい」の２項目は、受講前後ともに「とても高まった」「まあまあ高まった」と回答した割合が８～９割と高いことから、学生の実習に対する意欲は受講前から高いことが示された。また、「実習に向けた自己学習」の項目は、受講後の方が受講前に比べて得点が有意に高かったが、「とてもできている」「まあまあできている」と回答した割合は、受講後でも 14.5％に留まっていた。これらから、受講したことが実習に向けた自己学習に関連した可能性があると考えられるが、さらに自己学習に影響する要因を調べ、学生の特長を活かした学習支援をしていく必要がある。

2．演習での褥婦・新生児の診察技術の達成度

母性看護援助論Ⅱの演習で、「できた」「大体できた」と回答した学生の割合は、褥婦の診察技術では全ての項目で８割以上、また、新生児の診察技術では全ての項目で９割以上であった。したがって、褥婦・新生児の診察技術は、学習目標の達成基準を超えた結果が示され、学習目標が達成できたと言える。

一方、達成度が６割未満の項目から考えると、褥婦の診察技術では、「腹部の視診」「下肢浮腫の程度の触診」「観察した内容を褥婦に説明」といった項目を診察の一連の流れの中で系統立てて実施することは、褥婦の看護の経験がない学生にとっ

ては難易度が高いと考えられた。また、褥婦・新生児の診察技術では、ともに「判断したことを報告」の項目は達成度が低く、観察内容に留まっている課題が明らかとなった。看護技術の練習では、「進行性変化・退行性変化を観察し、アセスメントする技術練習をしてほしい」という自由記載があった。今後は、褥婦の診察技術についても、状況設定を用いた演習を組み立てることで実際の褥婦のイメージ化を促し、診察技術や観察に基づいた判断力の向上に繋がるように、演習方法を工夫する必要がある。また、本研究では、演習は他者評価による形成的評価を活用したが、今後は自己評価と他者評価を擦り合わせて、学生自身が達成できたことや自己の課題を明確化できるようにする必要がある。

3. 実習での学習達成度

実習初日の学内実習では、より詳細な状況設定下で新生児の診察技術を実施した。教員の評価では、「できた」「大体できた」と回答した割合は、8項目中の7項目で8割を越えていたことから、事前学習は概ね整い病院実習に臨めたと考えられる。

実習の評価では、「自立してできる」「ほぼできる」と回答した割合は、学生・教員ともに全項目で8割を越え、学習目標は達成できたと言える。

「褥婦の観察」「新生児の観察」の項目は、学生・教員ともに「自立してできる」と回答した割合が最も高かった。また、自由記載では、「実習初日の技術チェックで危機感をもち、事前学習が行えた」「新生児のバイタルサインの技術演習があってよかった」等があった。村井ら(2011)は、場面設定を取り入れた演習は、臨床における実習をリアルに再現することを可能にし、学生にとっては基本的な看護技術のイメージ化には有効であると述べている。このことから、演習に加えて状況設定を用いた実習初日の学内実習は、実習での新生児の診察技術のイメージ化に繋がったと考えられ、模擬患者を用いた演習の効果（勝田ら , 2013）と同様に、学生は適度な緊張感を持って演習に臨むことができ、主体的な学習姿勢に影響を及ぼしたと考えられた。また、病院実習で学生は、褥婦・新生児を受け持ち、母子の診察技術を頻回に実施する機会があり、技術をより確かなものとして習得できたと考えられる。これらから、「自立してできる」と答えた学生の自己評価では、「新生児の観察」が最も高くなったと考えられた。しかし、「自立してできる」と回答した割合でみると、「褥婦の観察」「新生児の観察」の項目は、学生の自己評価が5～6割であるのに対し、教員の評価は7割を超え、学生より高い結果であった。「実践を通した学習」「省察を通した学習」「フィードバックによる学習」等が実践能力の向上に寄与する（上村ら , 2016）ことから、実習での教員からの的確なフィードバックにより、学生自身が適切な自己評価ができるように関わる必要があると考える。また、学生自身が演習・実習を関連付けて、段階的に形成的評価が行えるように評価項目や評価基準を検討していく必要がある。

以上のことから、今後の課題として、母子への看護に必要な基礎的な知識の定着と強化を図り、ケアの根拠を考えられる力を育成できるよう、講義・演習・実習での教育方法を工夫する必要があると考えられた。そのためには、視聴覚教材やロールプレイなどを活用したシミュレーション教育（増山 , 2013）を取り入れることで、学生が知識の使い方を学び、考える力を養うことができると考える。

Ⅴ　結論

講義・演習・実習で学習した知識や診察技術を統合させて、産褥期の母子への看護実践能力の習得を目指した教育実践を試みた結果、以下の結論を得た。

1. 産褥期の看護に関する問題（小テスト）の約7割は、80％以上の正答率であった。
2. 講義アンケート項目（「実習への意欲」「実習に向けた自己学習」「講義での学習を実習に役立てたい」）のうち、「実習に向けた自己学習」は、受講後の方が受講前に比べて有意に得点が高かった（$p<.05$）。
3. 演習・実習の評価では、各項目について「できた／自立してできる」「大体できた／ほぼできる」を合わせた割合は、教員評価による１項目を除き８割以上であった。

これらのことから、看護基礎教育における産褥期の母子への看護実践能力の習得を目指した教育実践を通して、学習目標は達成できたと考えられた。

（本研究における利益相反はない）

引用文献

Billings. M. D., & Halstead. A. J. (2012/2014). 奥宮暁子，小林美子，佐々木順子（訳），看護を教授すること 大学教員のためのガイドブック（第４版）(p.427). 東京：医歯薬出版．

舟島なをみ（監）. (2013). 看護学教育における授業展開－質の高い講義・演習・実習の実現に向けて (p.117, p.149, p.218). 東京：医学書院．

磯山あけみ，坂間伊津美，渋谷えみ他 (2014). 褥婦の復古に関して学生が看護実践能力を獲得するための映像型教材の開発．茨城キリスト教大学看護学部紀要，6(1), pp.63-70.

勝田真由美，工藤里香，西村明子他 (2013). 模擬患者を対象にした母性看護技術演習の学習効果．兵庫医療大学紀要，1(1), pp.57-68.

厚生労働省 (2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．

厚生労働省 (2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書．

増山純二 (2013). ID に基づいたシミュレーション教育の取組み．看護教育，54(5), pp.374-381.

村井嘉子，堅田智香子，加藤亜妃子他 (2011). 看護実践能力の向上を支援するためのシナリオ学習教材の開発．石川看護雑誌，8, pp.93-101.

Polit. F. D. & Beck. T. C. (2004/2010). 近藤潤子（訳），看護研究 原理と方法（第２版）(p.368). 東京：医学書院．

戸部育代，深川ゆかり (2002). 新生児の生理的黄疸の観察と測定値のアセスメントにおける学内演習の授業評価について．母性衛生，43(2), pp.269-273.

上村千鶴，高瀬美由紀，川元美津子 (2016). 看護師による学習行動と看護実践能力との関連性．日本職業・災害医学会会誌，64(2), pp.88-92.

矢野貴美子，笠谷ひとみ (2014). 母性看護学実習における卒業時の看護技術到達度の実際－母性看護技術到達度が臨地実習で未経験項目の実態調査－．日本看護学会論文集（看護教育），44, pp.126-129.